

インターネットを介した対話学習： 日米交流文化学習プロジェクトの運営

大久保 真 道

メディアアート表現学科

Learning through Discussions over the Internet:
U.S. and Japan Collaborative Cultural Learning Project

OKUBO Masamichi

Department of Media Art

(Received November 12, 2001 ; Accepted January 18, 2002)

はじめに

人の学習行為においては、ソクラテスの時代から、あるいはそのずっと以前から、対話が重要な役割をはたしてきた。人間は対話をとおして多くのことを学び成長する。しかし、昨今の日本の教育状況をみると、学習者の情報収集と記憶力、そしてその再生能力に評価がかたより、学びにおける対話の重要性が忘れられていることがしばしば見受けられる。また、一方、ゆとり教育の呼びかけの下、学習者の自主性とわがままを取り違え、単なる放任主義におちいり、やはり対話が希薄になっていることもある。それらのような場では、人と人との関わりや話し合いによる学び、また、関わりによる学びによっておこる変化や成長といったことが軽んじられている。しかもそのようなアンバランスが、危機的な状況にまで進んでしまっている教育現場もあり、そのような場では教育の荒廃がすすみ、さまざまな問題がおこっている。

東京工芸大学芸術学部の大久保研究室（1994年度から2000年度までは基礎教育課程所属、2001年度以降はメディアアート表現学科に所属）では、「教育コミュニケーション」をキーワードに、インターネットの教育利用について研究と実践が続けられている。コミュニケーション手段としてのデジタル機器やネットワーク環境を利用していかに対話による学びの可能性を高めていくか、変化する学習環境とそれをとりまく社会状況の中でいかに学びを意味のあるものにするかについて、実践をとおして検証をしている。

大久保研究室では1999年の春、インターネット上にPaLS（Parallel Learning Squaresの略、日本語読みは

「パルス」）と名付けられたサーバをたちあげ、そこに仮想研究室を構築した。この電子的にできあがった研究室の別室ともいべき場を中心に、ネットワークを利用した対話による学習／教育活動をおこなっている。

本研究では、インターネットを介して出会った日本とアメリカの学生たちが、対話と交流をとおして相互の文化について学び理解を深める取り組みをした事例について、報告と検証をする。

対話学習について

学習するとは、知識やデータを蓄えることだけでは終わらない。学習するとは、それによってその学習者に何らかの成長や変化が見られることである。それは行動的な変化である場合もあり、思考様式の変化であることもある。教育は、その学習を援助し促進する活動である。そのような学習者の内的、あるいは外的な変化や成長を促す方法として、対話（他者とのやり取り）から学ぶ方法がある。そのような対話による学習、学びの相互関係は、現在の日本でどれほど認知されているだろうか。市場原理をもちこんだような能力主義、偏差値等によるランク付け、学習者間の競争が、あるいは行き過ぎたゆとり教育が、学びの場に閉塞感をもたらし、その主体である学習者を、学習活動の意味を理解し自ら進んで学ぶことから遠ざけてしまっている現実がしばしば見受けられる。そのような状況では、学習者が孤立してしまい、彼らの中にコミュニケーション力や、指導要領の改変でも大きく掲げられている「生きる力」を育てることが困難である。

山崎英則は、「子どもはいろいろな人々と交わり、彼

らとのコミュニケーションを通して、知らず知らずのうちいろいろなことを学習している。つまり、子どもは意図的・計画的教育のなかで、人間関係による無意図的・無計画的教育を自然に行っている」と述べている¹⁾。現在、この「コミュニケーションを通して」学習することが再評価されるべきである。教材の内容（情報）や学習項目の習得のみに過度な注意がはらわれてしまうと、山崎が指摘している人間関係から派生してくる学びが見落とされ、それが学習の場で成立しなくなってしまう。学習者が一方的に知識を吸収し、自己の成績にかたよってその意識を集中していくとき、学びの場のコミュニケーションはゆがめられたものになってしまう。学びの場に関わる人間は、教える者も学ぶ者も、コミュニケーションを図ることによりそれぞれが学び、成長することができるはずである。そのような学びのコミュニケーションが、今日の日本の教育現場で多くの場合、おろそかにされている。

「学び」が本当の意味で人の中に成立するには、他者との関わりが必要である。佐伯胖は、「学ぶ」ということは、「他人に伝えないではいられないこと、他人とともに味わい、認め合いたいこととして、ものごとを『知る』こと」だとしている²⁾。佐伯によれば、「『教え』と『学び』は表裏一体であり、相互構成的」なのであるという。学ぶ行為を学習者一人の問題にとらえ、個々の学習成果のみを評価するとき、このような学習と教育の相互性は見落とされてしまう。教師と生徒、教育者と学習者が、また、学ぶ者同士が、学びの協力関係や学びの相互作用をとおして学習し成長する、そのような学びの取り組みが、個人の成績を偏重する傾向の強い現在の日本教育現場を変えるには必要である。

ウィリアム・ヒルは、LTD (Learning Through Discussion) と呼ばれる討論をとおして学習を進める方法を持ちいて、米国の大学で教育活動を長年した³⁾。ヒルによれば、教員から発せられる情報を学生が受け身で学ぶ傾向の強い従来型の講義と、LTD をもちいた授業の違いは、「講義場面での学生は既成事実を単に記憶することを頻繁に行っている。それとはまったく対照的に、LTD のダイナミクスは自分自身の知的能力や対人関係力を評価する機会を与え、水準の高い分析的思考を促進する。」と説明されている。話し合いをとおして学習する時、学習者はより高い知的能力を発揮する必要がある、それをすることにより、LTD の参加者間で生きた応答がおこり、それぞれの中で深い学びがなされ、学習したことの理解も深いものとなる。LTD では、参加者は「自分自身の理解を系統立て、言語化すること」が求められ、それにより「記憶した情報のオウム返しのな学

習ではなく、真の学習」がなされるという。ここで示されているように、対話学習においては、学びはその学習者一人のものではなく、相互関係の上に成り立つ。そして、相手に伝えることが求められる学習では、ただ単に情報を提示できるだけではだめである。そのような場では、深化された理解により知識が自己のものとなった上でなければ、相互のやり取り、つまり学習活動が成り立たない。

インターネットを利用した学習プロジェクトについて

情報通信メディアが発達した現代、対話と関わり合いによる学びを成立させる場は、必ずしも学校の教室のみに限定されない。インターネットなどのコンピュータ・ネットワークを利用した共同学習が日本でも外国でもおこなわれており、それらに参加した学習者にとっては、そのネットワークが相手と自分を出会わせ結びつけた場所であった。そこでコンピュータ・ネットワークを介した共同学習に関する報告と研究をいくつか検証してみたい。

佐藤学は、1990年代前半に、米国マサチューセッツ州ケンブリッジの公立学校でコンピュータ教育について調査し、ネットワークと学びの共同体の構築の可能性を考察している⁴⁾。佐藤の報告によれば、ハガティ・スクールという小学校では、子どもが全員コンピュータの中に個人のフォルダをもっており、そこに各自自分の学習の記録や日記を入れている。その個人フォルダ内の情報は、他の子どもや教師に公開されており、それを見た者との間でメッセージの交換が始まり、対話がなされているという。

ケンブリッジの公立学校でおこなわれていたことは、教室のコンピュータをインターネット接続して世界中と結びつけ、大規模な試みをするものではない。学内LAN を使った簡便な設備と組織による取り組みであるが、そこに佐藤はコンピュータ・ネットワークを介して成立する学びの相互関係の新たな可能性を見いだしている。佐藤によれば、ハガティ・スクールを含むケンブリッジの公立校で築かれているコンピュータのネットワークは、「情報と情報のネットワークではなく、人と人のネットワークであり、経験と経験のネットワーク」であるという。人と人が結びつき、そこに参加する者同士がお互いのやり取りから学び成長することの出来る場として、ケンブリッジのコンピュータ・ネットワークは利用されているのである。

この他、海外におけるネットワークを利用した共同学習の取り組み一つに、Marlene Scardamalia と Carl

Bereiter らがおこなった、CSILE (Computer Supported Intentional Learning Environments) を利用したプロジェクトがある⁵⁾。1991年から1995年の間に運営されたこのコンピュータ支援による学習環境では、参加する子どもが疑問に思うことを起点として議論や学習をしながら、共同でネットワーク上の知識ベースを構築することをめざしていくものであった。CSILE のソフトウェアには、学習者間でそれぞれの疑問に関するコミュニケーションを計るためのさまざまな機能が用意されている。CSILE はその後、Knowledge Forum と呼ばれるソフトウェア製品に発展し、日本でもそれを利用した共同学習の取り組みがされている⁶⁾。このような取り組みでは、学びが個人の内側で止まるのではなく、知識の共用や共同知識の構築へと発展し、学びのコミュニケーションが活発になる。

日本国内でのネットワークを利用した共同学習プロジェクトとしては、1994年から3年間、東京都港区神応小学校で行われた「不思議缶ネットワーク」がある。これは、5年生と6年生の児童が、日常的な疑問を学びへと結びつける学習プロジェクトであった。応援隊と呼ばれる専門知識をもった大人たちが、通信ネットワークを介して子どもたちとやり取りをし、彼らの学びに関わり援助をした。このプロジェクトについて、運営に参加した美馬のゆりは、「ここでは、科学者は子どもの疑問に単純に答えるのではない。問題へのアプローチの方法を示唆したり、疑問を持つことの意義に共感的に関わりつつ、その背景に関心を寄せる。」と述べている⁷⁾。「不思議缶ネットワーク」の活動記録や関係者の証言からわかることは、「不思議缶ネットワーク」が単なる電話相談室的な子どもに分かりやすく答えを説明するサービスではなく、子どもと共に大人が学びのプロセスに参加し歩み、人と人との結びつきが学びを助けるものとなっていることである。

このようなネットワークを介しての共同学習活動においては、参加者間での関係づくりが重要である。ネットワーク向こう側にいる人を個人的に認識することができなければ、その場における学習は容易にはおこらない。不思議缶ネットワークで小学生の学習が深まるには、応援隊の大人との関係作りが重要だと指摘されていたが、そのように関係の樹立と深化が重要になるのは子供だけではない。大学生がネットワークを介して共同学習を活発化する場合にも関係樹立が必要だということは、PaLS を利用した自主学習プロジェクトの参加者たちの活動の様子からもうかがうことができた⁸⁾。

コンピュータ・ネットワークはあくまでも学習者の他者とのつながりを可能にするメディアでしかなく、コン

ピュータやインターネットの機能に注目することはそれほど重要ではない。みてきた事例からもわかることであるが、ネットワークというメディア越しの関係が樹立されるプロセスや、それぞれを学びのパートナーと認識出来たときにおきる対話による学習に注目するべきである。

PaLS について

PaLS サーバの運用には、FirstClass Intranet Server というソフトウェアが使用されている。これは利用者にBBS (電子掲示板) サービスを提供するサーバ・ソフトウェアである。ユーザ登録されたメンバー (東京工芸大学の関係者、ならびにプロジェクトのパートナーなどの外部の関係者) は、専用のクライアントソフトを使用してこのサーバにログインし、PaLS 内の会議室に送られたメッセージを読んだり、自分のメッセージを他のメンバーや会議室に送信したりすることができる。PaLS の運用開始時にうたわれた目的には以下のようなことが述べられていた。

PaLS (Parallel Learning Squares) は、大学の授業と平行して、学生と教師が協力して学習や研究活動をする場所を、ネットワーク上に開設するものです。実際の教員の研究室の延長、あるいは別室的な存在のバーチャルな小部屋を作り、授業に関わる教員と学生はもちろんのこと、学生同士が講義の場より更に深い交流を行い、共に学び合うことのできる場として、時間と距離を超えたコミュニケーション空間を築いていくことを目指しています。

PaLS は、参加者がコミュニケーションをとおして新しい気づきや発見をし、学び成長するための場を、インターネット上に作る試みである。そこで重要なのは、特定の知識や情報を学習することではなく、参加者間で知的好奇心に基づくやり取りがなされ、対話の中から学びを深め、さらにそこから次の学びへと進んでいくことと考えられた。インターネットという新しいコミュニケーション手段を利用して、対話学習によるより深い学びと理解をはかることが、PaLS 運営の目的である。

PaLS サーバの稼働開始とともに、それは授業の連絡や活動の記録、資料の提示、学生から教員ならびに学生間での応答の場などとして、講義の補助的メディアとして利用された。また、運用目的の第一に挙げられる対話学習での利用としては、授業とは直接関係のない学生主導の自主学習の場としても用いられた。PaLS と呼ばれる仮想研究室を利用しての最初の自主学習プロジェクトでは、専攻も学年も違う学生が集まり、「デジタルとは

何？」をテーマに、調査と対話を続け、その成果をホームページとしてインターネット上に発表した。学習段階でも、ホームページ作成作業においても、参加者は対話をとおして得られる気づきによって理解を深め、それぞれ自分の特技を生かし、協力しあいながらプロジェクトを進めた。前項でもふれたが、その学習を進めるにあたっては、まずは参加者間のパーソナルな関係の樹立が必要であった。

PaLS サーバは、2000年度も続けて授業や自主セミナーで利用された。2000年度に PaLS で新たに始まった取り組みは、海外の大学生たちとの交流学習プロジェクトである。インターネットの利点である時間と距離の障害を乗り越えての学びの輪の樹立と活用の実践として、一つの日米交流文化学習プロジェクトが運営された。その目的は、「アメリカと日本、それぞれの国の学生が、自ら自国の文化について調べ、相手に伝えることによって、その理解を深める。また、相手より向こうの文化を学び交流をとおして、異文化理解を深める。」とされた。このプロジェクトは単なる情報収集や研究発表ではなく、参加者が調べたことをもとに異文化の学生とコミュニケーションをとり、自国と相手国の両方の文化について気づきや新たな発見を得て、その理解の深化をはかることをめざした。

本研究の目的

この研究は次の二点を検証することを目的とする。第一に検証することは、日本とアメリカという離れた場所において、違う文化と違う言語をもつ学習者同士が、インターネットを介しておこなわれた日米交流文化学習プロジェクトで出会い、不思議なネットワークの参加者たちや前年に PaLS を利用した東京工芸大学の学生たちのように、パーソナルな関係を築くことができたかどうか、また、学びの相互関係ができたかどうかということである。第二に検証することは、このプロジェクトで、レポートやコメントの交換といったインターネットを介してのやり取りから参加者は何を学び、どのような気づきがあり、どのような変化があったかということである。

研究の対象と方法

研究調査の対象となったのは、東京工芸大学芸術学部で2000年度後期に国際文化比較論を履修し、日米文化交流学習プロジェクトに参加した3年次生と4年次生の25名である。交流学習プロジェクトの相手となったのは、米国テキサス州にある Baylor University で日本語の授業を受講している学生29名だった。なお、その Baylor University の学生たちは、最低1年以上の日本語学習歴

があるという。プロジェクト実施期間は2000年9月22日から12月15日であった。

プロジェクトの開始にあたり双方学生の顔合わせのため、インターネットを介して日米それぞれの教室を結び、iVisit というソフトウェアを利用して、テレビ会議を2000年9月22日におこなった。テレビ会議が実施されたのは、日本側の午前10時、アメリカ側の午後8時からだった。iVisit 利用によるテレビ会議のため、日本側はアップルコンピュータ社製のノートパソコン PowerBook G3 に小型 CCD カメラを取りつけて使用した。マイクはノートパソコンの内蔵マイクを利用した。テレビ会議の音声は部屋のスピーカから全体に流され、映像は液晶プロジェクターを使って教室前面の大型スクリーンに投影された。先方と会話する者のみがカメラの前に立った。アメリカ側は語学教室に備えてあるアップルコンピュータ社製のパソコン PowerMac G3 に小型 CCD カメラとマイクを取りつけ使用した。テレビ会議の音声は部屋のスピーカから全体に流され、映像は液晶プロジェクターを使って教室前面の大型スクリーンに投影されるとともに、学生の机に備えられた個々のモニターにも映し出された。先方と会話する者のみがカメラの前に立った。

このテレビ会議では、冒頭に日米両側の教員より英語（日本側教員からアメリカ側の学生に）と日本語（アメリカ側教員から日本側の学生に）で挨拶とプロジェクトの説明があった。その後、代表学生による挨拶の交換と、それぞれの国や生活に関する簡単な質疑応答がなされた。テレビ会議に要した時間は約45分間ほどだった。このインターネットテレビ会議は、利用した回線の制約などがあり、映像、音声とも、あまり鮮明ではなく、意志の疎通に障害を感じる場面が双方とも数回あった。そのような時には、同じやり取りを2度、3度とする必要があった。

日本側では、この初回のテレビ会議後にその場で、プロジェクトの主な活動となる PaLS の BBS 機能を利用した文章による交流学習の説明が教員より学生になされた。

日米文化交流学習プロジェクトの「自ら自国の文化について調べ、相手に伝えることによって、その理解を深める。また、相手より向こうの文化を学び交流をとおして、異文化理解を深める。」という目的達成のため、両国の教員が事前に相談して、テーマと具体的運用方法を決定していた。今回は、日米の学生が「武士とカウボーイ」をテーマに、それぞれ自国の文化について調べ、相手の国の学生にわかるように PaLS 上の専用会議室にそのレポートを書き込み、それについて質疑応答をしながら学びを深めることとした。

双方の学生とも、この調査学習のために6つのカテゴリ・グループに分かれた。カテゴリは、1) 歴史、2) 仕事について、3) 衣装と道具、4) 家庭生活と社会生活、5) 文化、6) 思想信条、精神、とされた。どちらの国の学生も原則として興味のあるカテゴリ・グループに所属し、各グループの所属人数は、各国ともおよそ4、5名、両国合わせて約10名となった。それぞれのグループ専用の会議室がPaLS内に用意され、学生は自グループの会議室に書き込みをするように指示された。ただし、各会議室はオープンなもので、プロジェクト参加の学生は誰でも、他グループの活動も自由に見ることができた。このBBSを使った交流学習活動は、インターネットテレビ会議の翌週より始まった。

電子会議室を利用した最初の活動として、日本の学生は武士について日本語で、アメリカの学生はカウボーイについて英語でレポートを書き、所属グループの会議室に出した。レポート作成にあたっては、内容をしばって簡潔に、相手側の言語力を考慮して書くことを注意された。一つのレポートの長さの目安としては、パソコン画面一面ですべて見る程度とされ、日米ともほとんどその範囲でレポートが作成された。また、「衣装と道具」など一部のグループのレポートでは、相手側の理解の援助のため画像が添付されていた。

次の段階では、それぞれの学生が相手国学生のレポートを読み、指定の書式(分かったこと、まだ分からないこと、さらに知りたいこと、自分の思っていたことと違っていたこと、コメント)にしたがって評価レポートをPaLS内の会議室に出した。

三つ目の活動では、各学生が届いた評価レポートを参考に自分が作ったレポートを再考して必要な変更をほどこし、訂正した新しいレポートを自グループ会議室に書き込んだ。また、届いた評価レポートを読んで感じたことを短くまとめて出した。

ここまでのレポート交換をした後、2000年12月1日に二度目のインターネットテレビ会議が初回と同じ環境で行われた。これが最後のテレビ会議となった。今回のテレビ会議では、双方の学生よりプロジェクトに参加しての感想や、相手へのコメント、レポートに関する質疑応答があった。テレビ会議の所要時間は約40分間だった。この最終テレビ会議で、はじめてアメリカにいる自分のパートナー学生の実感した日本人学生もいたようである。

交流学習プロジェクトの最後の活動となる最終レポートでは、各学生は自分に届いた評価レポートを読んで感じたこと、自国と他国の文化について学んだこと、ものとのとらえ方や考え方の相違点や類似点について学んだこ

となどをまとめた。また、この交流学習全体に対する感想意見などをまとめた。

交流学習に参加した日本側の学生が履修していた国際文化比較論では、教科書をもとにしたクラス内での討論を交流学習プロジェクトと平行して実施した⁹⁾。そこでの討論では、「企業」、「芸術」、「教育」、「価値観」をテーマに、2000年9月から12月まで比較社会学習をした。

参加学生には、プロジェクト開始前と終了後にアンケート調査をした。アンケートでは、「自国の文化について」、「外国の文化に対する興味」、「アメリカについて」、などに関して、5段階で答える質問がされた。また、プロジェクト終了後のアンケートでは、自由記述式の欄をもうけ、授業全体やプロジェクトに関する感想や気づいたことを各自の言葉で書かせた。

検証のためのデータとして、このアンケート調査の結果と、プロジェクトの最終レポートで学生たちが書いたことをもちいる。

結 果

第一の検証項目である「日米交流学習プロジェクトをとおして参加者間にパーソナルな関係ができたか、学習のパートナーシップができたか」に関して、アンケートと最終レポートにあった記述を抜き出してみたい。まず、何らかの結びつきを感じた、コミュニケーションがとれたという意見を引用する。

「リアルタイムで、ベイラー大学の学生とアクセスでき、会話ができてしまうことに、ネットのすごさをものごく感じた。海外に私は行ったことがないが、少しだけ行った気になれてうれしかった。」

「パソコンなどで映像通信したことで、相手の顔や様子がわかり、文字だけではできない良いコミュニケーションが出来たと思います。」

「私がいう“ふれあい”とは、その人自身の前で自分の思いを伝えること(会話だったり、接触だったり、)です。映像通信の方法は私がいう“ふれあい”に近いものがあって、このような良いコミュニケーション方法がこれからもどんどん増えていってこれればいいなあと思っています。」

これらの意見からうかがえることは、iVisitを使ったテレビ会議では、アメリカにいるパートナー学生の姿がインターネット経由で見えたことで、その存在を実感することができ、パーソナルなつながりを感じたということである。このインターネット経由のテレビ会議については、「時代が進化したのを感じると共に、同じ時間を違う国同士で共有できることは、すばらしいと思った。向こうの教室の雰囲気なども伝わってきて、国際交流が

できたと感じた」と述べる学生もいた。

また、「生でコミュニケーションしていると言う実感があつたし返事をわざわざ日本語で返してくれると、とてもうれしかった」という意見のように、PaLSを使ったレポート交換が、相手との関係作りに役立った学生もいた。

これらの意見をみると、テレビ会議やBBSの活動をとおしてネットワークの反対側にいるアメリカの学生を、自分と同じ学びをしている人間として実感することができた学生がいたということがわかる。

その一方、共に学び合う深い関係の樹立までにはいたらなかったことを報告するものも複数あった。ある学生は、「アメリカの学生とは、個人同士を、もっと深く知り合えたら、もう少しお互いにていねいにやりとりができたのかもしれない」と、関係の弱さが学習活動の停滞をもたらしたと指摘している。この他にも、「今回の実習で残念だったのは、自分のレポートについて、評価レポートが届かなかつたことである。私の書いたレポートについて、それが分かりにくかつたとか、難しかつたなどのコメントが欲しかつた。」と書いた学生のように、レポート交換による学習活動が思ったように進まなかつたことを報告した者がいた。このような記述からもわかるように、学生によっては、アメリカのパートナー学生との間の学びの関係がうまく成立せず、それを学習につなげることができなかつたようである。

使用メディアに関して、「今回の交流学習についてはiVisitの通信不全等でなかなかアメリカの生徒とうまくコミュニケーションが取れなかつたように思う。特に送受信の取り込みのスピードが遅く、会話という形が成り立たなかつたのではないか。せっかくの機会ではあつたが不完全燃焼であつた感が否めない。」と述べている学生がいたが、PaLSサーバやiVisitなどシステムの不備が、対話関係を樹立することの障害になつたとの指摘もあつた。

もう一つ、関係樹立にはいたらなかつたが相手の存在は実感したという意見があつた。ある学生は、自分のグループではレポートの交換があまりさかんではなく、双方とも単に義務としてやっていることを感じ、「姿の見えないネットでも人の態度は伝わるものだと感じた。やはり、コミュニケーションはどちらかの真剣さが欠けても成立しないのだ。今回、その事を改めて教えられた。」と報告した。消極的な姿も、ネットワークを介して感じられたということである。

言語の壁もあつたようだ。今回のプロジェクトでは、日本側は日本語で、アメリカ側は英語で、それぞれ相手にわかるようなやさしい言葉でレポート書くこととなつ

ていた。しかし、やはり外国語で届いたレポートやメッセージを読むことは、双方とも難しかつたようである。ある学生は、「コミュニケーションに言葉は関係ないとは言ふものの、やはり『インターネット』という媒体を使つての「コミュニケーション」は簡単ではなく第一に言葉の壁を感じ、またあくまでも授業の一環、という意識が抜けず相手が近く感じられなかつた。」と述べた。この学生のように、言葉の問題が壁となり、学びの関係もできず、主体的に関わることができなかつた者が数名いたようである。

第二の検証事項は、学生が学んだこと、感じたこと、成長や変化したことである。これについては、アンケート結果を表1としてまとめてある。アンケートの各質問に対して学生は、五段階の答えの中から一つを選択して答えた。これにアンケート用紙の自由記述欄ならびにプロジェクトの最終レポートに書かれたことを合わせて、第二検証事項についてみていきたい。

自国の文化について、表1にある数値結果だけを見ると、それに関して知識が増えたと述べたものはあまり多くない。しかし、アンケート用紙の自由記述欄ならびにプロジェクトの最終レポートからは、気づきや意識の変化がみてとれる記述がみつけられた。以下に引用するのはその一部である。

『「世界の中の日本」ということで、あらためて、日本の国民性を考える機会をもつことができました。』

「お互いの国で調べ、発表できたことは、自国の文化を再認識することにも繋がり、とてもよい機会であつたと思う。」

「色々調べているうちに、自分の国の文化である武士のことが、多少わかつてきた気がする。」

相手国のアメリカについて、アンケートの数値結果で

表1 文化に関するアンケート結果（有効回答11名）

質問1「日本文化について知っていますか？」	
知っている度合いが上がつた	3名
知っている度合いは変わらない	6名
知っている度合いが下がつた	2名
質問2「アメリカという国をどの程度知っていますか？」	
知っている度合いが上がつた	1名
知っている度合いは変わらない	7名
知っている度合いが下がつた	3名
質問3「外国の文化について興味がありますか？」	
興味の度合いは変わらない	10名
（上記10名中8名は、両回答とも最高レベルの「とても興味がある」であつた。）	
興味の度合いが下がつた	1名

は、1名しかその知識レベルの高まりを示さなかった。けれども最終レポートでは、アメリカ文化に関する認識を新たにしたという記述が複数あった。以下は、その一部である。

「私の考えていたカウボーイに対してのイメージは、がさつで馬を乗り回しているイメージだったので、カウボーイについてのイメージが全く正反対だということに驚いた。」

「向こうの学生さんがカウボーイについてしらべて送ってきてくれた内容を読んで、今まで思い描いていたステレオタイプのカウボーイと実際のカウボーイが全然違っていった。」

異文化理解はこの交流学习の目的の一つであるので、外国の文化に対する興味の度合いについてもアンケート調査した。一名を除く全員の興味レベルには変化が見られなかった。しかし、それらの学生は初回も二回目もどちらのアンケートでも、最高位の興味レベルを示していたので、単純に変化無しとすることはできない。また、アンケートの自由記述では、「他国の文化との交流で、自分の考えが広がったと思う。」といった認識の変化を報告するものがあった。

学生のアンケート結果やレポートから、いくつかの共通する気づきや変化があったことがうかがえる。まずは、自分と相手国学生の間で共通性を見いだしたというものがあつた。以下に一人の意見を引用する。

「いくら顔つきや言葉、言語が異なっても、人間は人間なのだ、という基本的なことを改めて実感することができたことが、わたしにとって意義があつた。恥ずかしい時は、口数が減ったり、曖昧に笑ったりする。ただそれに、その国の言語のイントネーションやジェスチャーが加わったりするだけなのだ。それによって多少、違和感を感じるだけで、心の中身は万国共通なのだ。」

このように表面的な違いはあるかもしれないが、人として本質的な部分では同じであるということに気づいたという報告があつた。

共通性と共に、自分たちと違う姿をアメリカの学生にみた者たちもいた。特に、以下の引用のように、意識や考えていることの違いを感じたという意見は複数あつた。

「全体的に、今回この授業を受けて感じたことは、アメリカのペイラー大学の人達のほうが、考えている事や感じている事が日本の大学生よりも現実的で、とても深いような気がした。評価レポートに対してもそうだし、授業中に中継で話した時にもそう感じた。」

ビジネスに関する質問については、今回参加した日本人学生にはあまり意識や興味のうちにあるものではないようで、それに関して以下の引用のような驚きを感じた

との報告があつた。

「話の内容については日本人があくまでも個人の生活や身の回りの話を聞きたがっているのに対して、向こうの学生の一人はビジネスの話などを質問してきたので思考に対して少し違った価値観を持っているということをもぎまぎと感じた。」

ステレオタイプに関する気づきも複数報告された。

「よく、自己主張が強いとか、表現が大げさでがさつだとか、アメリカ人に対してはいわゆるステレオタイプなイメージばかり持っていたので、ペーラー大学の学生さん達と意見のやりとりをしたときは意外とみんなシャイで日本人に似ていたのでちょっとほっとした。」

「こういう顔と顔を合わせる事で意外な発見ができることがおもしろいと思う。テレビ会議の授業では、思ったよりも恥ずかしがり屋な向こうの学生さんたちに驚いた。ここでも『アメリカ人はみんなフレンドリーで明るい人』というイメージをまた覆された。とてもシャイで、話すのもテレながらで、とても微笑ましかつた。」

相手の立場で状況を見ることを学んだ学生もいた。一人は言葉の問題から、そのような気づきがあつたようである。以下がその学生の報告である。

『『日本語が難しかった』という感想をもらい、自分が相手の『日本語を学んでいる外国の人』という状況をあまり考えられていなかったことに反省し、また、日本人でさえうまく使いこなせないことがあるというのに、外国の人が学ぶ日本語はとても難しいに違いないと、考えさせられた。このことから、言葉以外の面においても、私たちは普段外国の人に対してどのくらい相手の身になって行動できているのだろうか、と考えるに至つた。』

考 察

アンケート結果からは数値的に顕著な成果をはかることはできなかったが、個々の学生からの報告や意見では、学びと成長の様子をうかがうことができた。

第一の検証項目である、「インターネットを介しておこなわれた日米交流文化学習プロジェクトで日米の学生が出会いパーソナルな関係を築くことができたかどうか、学びの相互関係ができたかどうか」に関しては、一定の出会いはあつたが、その関係はまだあまり深いものまでにはなっていないかつたようである。

インターネットを介した交流学习において、かなりの数の日本側の学生たちは、アメリカにいたパートナー学生たちの存在を、実在の人たちとして感じるようにはなつた。つまり、この交流学习プロジェクトが、バーチャルで無機的なもので終わらず、人を感じられたものとなつたということである。そのような相手を実感することに

役立ったのが、iVisit を使ったテレビ会議である。リアルタイムで相手の顔が見え、相手の声が聞こえたことが、文字通り顔が思い浮かぶ関係の樹立に貢献した。また、自分の書いたレポートに、相手から反応があることも、その人物の存在を実感させることとなった。このような遠く離れた海外にいる相手とのパーソナルな関係樹立が可能になったのは、インターネットによって両側が結ばれ、コミュニケーションのチャンネルが確保されたからである。インターネット以前の教室環境では実現が困難な学びの協力関係がここでは始まったのである。

その一方で、相手の存在を感じそれを認めることができた学生たちも、その先、よりパーソナルなつながりを深め、関係の中でさかんやり取りをし、そこで多くのことを共に学ぶまでにはいたらなかった。大きな障害は母国語の違いという言葉の問題があるようだ。その他にも、インターネットの環境の未発達や不備の問題があった。インターネットは時間の壁を越えることを可能にするといわれているが、時差の問題が頻繁にテレビ会議をすることを困難とした。もしテレビ会議がもう少し多くできたなら、学びの関係の深化の度合い違ったものになっていたかもしれない。

第二の検証項目は、「日米交流文化学習プロジェクトで、インターネットを介してのやり取りから、参加者は何を学び、どのような気づきがあり、どのような変化があったか」ということである。

テーマである「武士とカウボーイ」については、その知識の深まりや誤解の訂正がみられた。また、そこから派生して、本国および他国の文化に対する意識の変化を経験した者もいた。

このような交流学習では、学習事項に関する知識の習得はもちろん大切であるが、それ以上に有意義なことは、その活動過程においてさまざまな発見がなされることである。今回のプロジェクトでも、お互いに共通する本質的な部分と、意識や態度などにみられる相違などに気づくことができた学生が何名もいた。また、自分のステレオタイプに気づく者や、他者の視点にたつものごとをみることを学ぶ者もいた。これらの意識の変化、内的成長を得ることは、単に本で読んで学ぶような知識の積み重ねだけでは難しいものである。それをこの学生たちは、対話学習により実体験をとおして学んだ。

インターネットを介して、日米の学生の出会いがあり、不完全ではあるが関わり合いと対話が行われたことは事実である。また、それによって参加学生の内に何らかの学びがおこったことも事実であった。しかも、そのネッ

トワーク越しの他者との出会いによる学びは、学習者の考え方や態度といった内面的な部分に関する変化であった。

インターネットを介して樹立されるコミュニケーションチャンネルを利用した学習活動の可能性は、この学習者の出会いと関わり合いの広がりにある。ウィリアム・ヒルが教室でLTDを用いておこなった学習者の高い分析的思考を促進する学習活動が、ネットワーク越しに遠隔地にいる者同士でも運営することができるのである。ネットワークを利用する教育者は、そのメディア越しの関係とそこでおこる学習者間の対話と学びの重要性にさらに意識を向けるべきである。

これからの課題

インターネットを介した対話学習プロジェクトでは、顔の見える関係の深まりがそこでの学びに役立つことがわかってきており、関係樹立に関連する要因の検証がさらにすすめられることが今後の課題である。

今回のようなケーススタディでは、量的、数値的計測よりも質的計測が重要であるが、そのデータ収集の方法には、まだ改善の余地がある。アンケート調査では、調査項目や問いかけの方法などを修正し、学生からより自由な感想や意見を引き出す工夫が必要だと感じた。さらに今回は日本側学生のデータしか検証できなかったが、アメリカ側学生についても検証できればよかった。

注

- 1) 山崎英則・浜田栄夫 編著 『新しい教育の基礎理論』、(ミネルヴァ書房、2001)
- 2) 佐伯胖・藤田英典/佐藤学 編 『学び合う共同体』、(東京大学出版会、1996)
- 3) J. レイボウ、M. A. チャーネス、J. キッパーマン、S. R-ベイスル 著、丸野俊一、安永悟 訳 『討論で学習を深めるには：LTD 話し合い学習法』、(ナカニシヤ出版、1996)
- 4) 荻宿俊文、佐伯胖、佐藤学、吉見俊哉 『コンピュータのある教室：創造的メディアと授業』(岩波書店、1996)
- 5) CSILE (Computer Supported Intentional Learning Environments), <http://csile.oise.utoronto.ca/>
- 6) CSILE Japan Contents, <http://oshima1.ed.shizuoka.ac.jp/csilejapan/contents.html#anchor04>
- 7) ネットワークと教育改革4、http://www.netty.ne.jp/csl/CSLJNL_net4.html
- 8) 大久保真道 「Learn and Express through the Internet」教育工学関連学協力連合第6回全国大会講演論文集(第二分冊)、pp. 873-874
- 9) 荻谷剛彦編 『比較社会・入門：グローバル時代の<教養>』、(有斐閣選書、1997)